

聞き取り調査からみた日本語を母語とする 韓国語学習者の韓国語音声の問題点

延 鎮 淑・崔 昇 浩

1. はじめに

日本語母語話者にとって韓国語は他の外国語と比べて習いやすいとよく言われている。確かに、日本語と韓国語は文法構造の面では類似点が多いので、習いやすいと言える。しかし、韓国語は音韻体系及び音声の特徴が日本語のそれと異なる部分が多く、発音が難かしいとの学習者の声をよく耳にする。

我々は、日本語を母語とする韓国語学習者を対象に調査を行い、その資料をもとに日本語母語話者の韓国語音声聞き取りの特徴を母語である日本語の音韻、音声の特徴と比較しつつ分析し、日本語母語話者の韓国語発音の問題点と対策を考える。この研究は、今まで殆ど行われていない研究であり、日本語母語話者の韓国語音声教育に資することを目的とする。

2. 調査の概要

1) 調査の内容と方法：(1) 聞き取り調査(調査Aとする)：53の単語を示し、一つの単語に対してそれぞれ四つの選択肢を録音テープで聞かせ、その中から正しいものを選んでもらった。例) 우유(牛乳) ① [iju] ② [uu] ③ [uju] ④ [ii] (③は正答) (2) 発音調査(調査Bとする)：聞き取り調査と同じ単語を発音してもらい、カセットテープに吹き込んでもらった。

2) 調査の対象：信州大学で第二外国語として韓国語を受講していた学生。聞き取り調査に46名、発音調査に29名が参加した。対象となった学生は韓国語を平成8年度4月から習いはじめ、調査Aと調査Bが行われた平成8年度12月まで授業期間だけでおよそ6ヶ月間学習をした。授業には文法、講読、会話の三つのコース¹があり、対象となった学生の中には二つ以上のコースを履修した学生が多数含まれている。本稿では、聞き取り調査の結果のみ取り上げて述べる。

3. 調査の結果

3.1 母音の混同

韓国語の母音は、日本語の母音より数が多い。単母音として ㅏ [a], ㅑ [ɔ], ㅓ [o], ㅕ [u], ㅗ [i], ㅛ [i], ㅜ [e], ㅠ [e] の8種がある。このうちㅜとㅠは若年層ではその音韻的対立を失い、ともに [e] で発音される。二重母音には ㅘ [ja], ㅙ [jo], ㅚ [jo], ㅜㅜ [ju], ㅟㅟ [je], ㅟㅟ [je], ㅘㅘ [wa], ㅘㅘ [we], ㅟㅟ [we], ㅘㅘ [wo], ㅘㅘ [wi], ㅟㅟ [we], ㅟㅟ [ii] の13種がある。このうち音韻的対立を失い、ㅜㅟとㅟㅟは [je] に、ㅘㅘ, ㅟㅟ, ㅟㅟはともに [we] に発音される。このように母音の数が多いため日本語母語学習者にとって

韓国語の発音はもちろん聞き取りが難しくなるのである。この母音の中で最も聞き取りにくい母音と言え、ㅏ, ㅑ, ㅡ, ㅓなどを挙げられる。何故問題になるのかを調査の結果を取り上げて説明する。

1) ㅡ [i] と ㅑ [u] の混同

<表1>は、調査の中で「ㅡ」と「ㅑ」の混同がみられた項目の一部である。

<表1>

A-20 공부 (勉強)		A-39 뿌리 (根)		A-46 얼굴 (顔)	
kombu	0	p ^h uri	0	olgur	4.3
k ^h oŋbu	17.4	p ^h iri	34.8	oŋgul	30.4
<u>kombu</u>	32.6	<u>puri</u>	45.7	olgul	28.3
koŋb ^h i	50.0	puri	19.6	oŋg ^h il	37.0

(正答)

梅田 (1994)²⁾によると、韓国語の「ㅑ」[u] は後舌円唇狭母音、「ㅡ」[i] は張唇中舌狭母音とされている。A-20の場合、正しい発音は「ㅑ」[u] であるが「ㅡ」[i] を選択した学生が半数を占めている。A-39では34.8%、A-46では37%の学生が混同して [i] を選択している。これは母語の音韻の特徴が関与している。現代日本語のウ [u] は、韓国語の「ㅑ」[u] のように唇を丸めない。また「ㅡ」[i] のような張唇中舌狭母音でもない平唇母音である。つまり、日本語のウが韓国語の「ㅑ」[u] と「ㅡ」[i] の言わば中間音であるため混同が起きるのである。

2) ① ㅓ [ɔ] と ㅗ [o] の混同

韓国語の「ㅓ」は、梅田 (1994) によると後舌円唇半広母音 [ɔ] であり、「ㅗ」は後舌円唇半狭母音とされている。「ㅓ」は日本語に存在しないため特に日本語母語学習者にとっては発音が困難である。発音の仕方として学習者に下の顎を引き、アを発音するときと同じ口の形をしてオを発音するようにと説明している。しかし、たいていの学習者は理論がわかっていて単独の場合はよく発音が出来るが、単語の中では、「ㅗ」に近い発音になってしまう。この現象は聞き取りの場合でも同じであり、実際、調査で<表2>のとおりA-37では13%、A-22では11.1%の学習者が「ㅓ」を「ㅗ」に混同した。韓国語の母音の中でも、この「ㅓ」が日本語母語学習者にとって、発音の面でも聞き取りの面でも大変難しいと言える。そこで、聞き取りや発音の練習に最も力を入れる部分でもある。一方、「ㅗ」は日本語のオに比べて、狭い母音である。厳密に言えば、日本語のオとは異なるが、初級の学習者には同じ発音と考えてよいと説明してよいと思われる。従って、「ㅗ」の識別に大きな問題はない。

<表2>

A-37 읊아서 (移って) A-22 읽어요 (読みます)

olmaso	13.0	ilgojo	11.1
ommaso	6.5	igojo	0
<u>olmaso</u>	76.1	<u>ilgojo</u>	86.7
omaso	4.3	ilgi ^h ojo	2.2

(正答)

この他に半母音 [j] が加わった二重母音の「ㅟ」と「ㅢ」に半母音 [j] が加わった「ㅟ」の混同もみられた。「ㅟ」もやはり「ㅟ」のように日本語に無い母音である。〈表3〉をみると、全般的に単母音の「ㅟ」と「ㅢ」の場合より混同の割合が高い。「ㅟ」を「ㅟ」に混同することは少なく、「ㅟ」を「ㅟ」に混同するケースが多い。これは日本語の中に「ㅟ」に対応できるヨがあるからであろう。〈表3〉のA-19の場合、選択肢の3番目と4番目を合わせると、56.5%の学習者が「ㅟ」と「ㅟ」を混同したことになる。

〈表3〉

A-19 결혼 (結婚) A-44 라면 (ラーメン) A-48 겨울을 (冬を)

kjɔ̃fon	41.3	famjɔ̃	2.2	kjourɪrɪl	4.3
kjɔ̃lhɔ̃n	2.2	famjɔ̃ɔ̃	13.0	kjourɪl	71.7
kjɔ̃fõɔ̃	34.8	famjɔ̃	30.4	kjourɪl	21.7
kjɔ̃fon	21.7	famjɔ̃n	54.3	kɔ̃urɪl	2.2

(正答)

結果をまとめると次のようなことが言える。まず、〈表4〉をみよう。これは韓国語の単母音と日本語の5母音を発音上最も近いと思われるもの同士に対応させたものである。

〈表4〉

	I	II	III	IV	V
日 本 語	ア	イ	ウ	エ	オ
韓 国 語	ㅏ	ㅣ	ㅓ/ㅡ	ㅝ/ㅞ	ㅟ/ㅢ

IとIIでは混同が起きる確率が非常に低い。しかし、IIIとVでは今まで述べてきたように混同率が高い。IIIでは、母語の干渉で「ㅓ」も「ㅡ」も日本語のウと同じだと誤認してとらえてしまうので「ㅓ」と「ㅡ」の混同が起き、Vでは、日本語には韓国語のような「ㅟ」と「ㅢ」の音韻的対立がないため「ㅟ」と「ㅢ」の混同が起きるのである。IVでは、最近韓国で発音上の区別が段々無くなっていくので問題にはならない。

3. 2 平音・激音・濃音の混同

〈表5〉は、聞き取り調査資料から平音/激音/濃音の混同がみられた項目を示したものである。

〈表5〉

A-8 좌석 (座席) A-6 다람쥐 (りす) A-36 토끼 (うさぎ)

t̚ʃaso ^k	2.2	t̚ʰaramdʒwi	19.6	to ² ki	6.5
t̚ʰwaso ^k	39.1	tarandʒwi	19.6	t̚ʰo ² ki	54.3
t̚ʃwaso ^k	34.8	t̚ʰaramdʒi	13.0	t̚ʰok ^h i	39.1
t̚ʃwaso ^p	23.9	t̚aramdʒwi	47.8	ʔtogi	0

(正答)

破裂音・破擦音において、日本語と韓国語は調音方法が全く異なる。日本語は有声音/無声音の対立であるが、韓国語は非喉頭化音/喉頭化音の対立であり、非喉頭化音においては、強音/軟音の対立である(梅田(1984))³。つまり、韓国語には平音(無気音)/k, t, p, /, 激音(無声有気音)/k^h, t^h, p^h, c^h/濃音(無声無気音)/^ʔk, ^ʔt, ^ʔp, ^ʔc/という音韻的対立がある。このような区別が日本語にはないため日本語母語学習者にとって、これらを聞き分けることは非常に難しい。〈表5〉のA-8とA-6は、平音を激音に混同した例である。A-8の場合、正答である平音「와」[tjwa]を激音「와」[t^hwa]に混同した学習者は39.1%である。平音と激音と日本語の/p, t, k/を強弱関係で表すと平音が最も弱く、その次が日本語の清音で、激音が最も強い。このことから日本語母語学習者は聞き取りの場合でも、発音の場合でも平音と激音を日本語の清音の習慣で行うから混同が起きるのである。激音を平音に混同する場合よりも平音を激音に混同するケースが多い。濃音は日本語にはない発声習慣で語頭、語中を問わず、無気音で喉頭化音である。日本語母語学習者にとって完全な濃音の聞き取り及び発音はかなり難しい。A-36で濃音を激音と混同した学習者は39.1%を占めている。

3.3 終声の混同

韓国語には終声字として使える子音字は27種類⁴あるが、終声として発音される終声音は[p], [t], [k], [m], [n], [ŋ], [l]の7種類がある。

1) [p], [t], [k]の混同

この7種類の終声の中で日本語母語学習者にとって聞き取り、発音両面で難しいものは[p], [t], [k]である。簡単に説明すると、[t]は歯茎音で日本語の〈いった〉の「っ」、[k]は軟口蓋音で日本語の〈みっか〉の「っ」、[p]は両唇音で日本語の〈ラッパ〉の「ッ」のような発音として日本語母語学習者に理解させるという方法がわかりやすいと言える。学習者にこのことを説明してもその違いが分からない学習者が多い。A-16の[p]の場合は、発音するとき口の形を見れば、[p]ということがすぐわかるようであるが、テープを聞かせた調査では、[t], [k]とともに混同した割合が高かった。[p], [t], [k]は音声として日本語に存在しても、音韻としては同一音素/Q/の条件異音になるからである。

〈表6〉

A-2	무엇 (何)	A-3	웃고 (笑って)	A-16	비음 (ハンダルの子音字)	A-35	날 (個々の物の)
mio	4.3	ugo	0	p ^h iu ^p	4.3	na	4.3
muo	19.6	u ^h ko	43.5	piu ^t	37.0	nati	0
muo ^t	56.5	i ^h ko	6.5	piu ^k	26.1	na ^k	43.5
muo ^k	19.6	u ^k ko	50.0	pi ^h	32.6	na ^t	52.2

(正答)

〈表6〉の結果とおり、今まで述べてきた他の項目と比べると、混同率が非常に高い。終声のない母語を普段使っている日本語母語学習者にとって、終声の正確な発音はもちろん聞き取りはかなり難しいという証明でもある。

2) [-m], [-n], [-ŋ]の混同

韓国語には, [-m], [-n], [-ŋ] が「감」[kam] (柿), 「간」[kan] (肝), 「강」[kaŋ] (川) のように音韻的対立をする。日本語では, これらの音は音声的にはある。例えば, [hoN]/hoN/(本) は, [hommo]/hoNmo/, [honto]/hoNto/, [hoŋka]/hoNka/だが, 音韻論的には同一の音素/N/に帰納され区別がない。つまり, /N/の後の音素の環境により/N/がそれぞれ[m], [n], [ŋ]に発音されるのである。唇音 [p, b, m] の前は [m], 歯茎音 [t, d, n, tʃ, ts, dʒ, dz] の前は [n], 軟口蓋音 [k, g] の前は [ŋ] になる。このような母語の発声習慣が韓国語の終声音 [-m], [-n], [-ŋ] の聞き取り及び発音に現れるので, 混同が起きるのである。

<表7>

	正答→混同	調査項目	正 答		混 同	
A34	[n] → [ŋ]	원인(原因)	[wɔnɪn]	37.0	[wɔnɪŋ]	43.5
A24	[m]	빈부(貧富)	[pinbu]	52.2	[pimbu]	28.3
A53	[m] → [n]	다람쥐(りす)	[taramdʒwi]	45.7	[tarandʒwi]	45.7
A49	[ŋ] → [n]	상당(相当)	[saŋdaŋ]	41.3	[sandaŋ]	32.6

A34の最後の正確な発音は [n] であるが, 日本語の語末の/N/が口蓋音 [N] であり, [ŋ] に調音の位置が近く, また, 聴覚印象もよく似ているのでその影響を受けて [ŋ] を選択した学習者が正答者より多い。A24は日本語では/N/の後が [b] の場合, [m] に発音されるので [m] を選択した学習者は28.3%である。A53は [d] の影響で正答の [m] を [n] に混同した学習者は45.7%もある。A49では32.6%の学習者が [d] の影響で [ŋ] を [n] に混同している。

4. 終わりに

我々は, 今まで聞き取り調査からみた日本語母語学習者の韓国語音声の問題点について, 学習者の母語の影響が大きいという観点から述べた。日本語に存在しない母音「ɨ」や濃音などは, たくさんの聞き取りと発音の練習が必要だが, 母音「ㅡ」と「ㅓ」, 平音, 激音, そして, 終声の [-m], [-n], [-ŋ] のような母語の干渉による混同である場合は, 聞き取りや発音の練習をする前に学習者に充分母語の音韻体系と韓国語の音韻体系の違いを理解させた上で練習をすることが必要であり, その方が練習もより効果的であると言える。

母語の干渉による韓国語音声の難点になるものは, 上で述べたものばかりではない。ここでは取り上げなかった [taramdʒwi] を [taramdʒɨ] に, つまり, 二重母音を単母音に聞き取ることや韓国語の CVC の構造の語を CVCV として聞き取る傾向などがある。これらは発音調査の結果の分析のときに明らかにしたい。

後 記

本稿で扱った資料収集は延が行い, 調査資料の整理は延, 崔が行った。本稿作成では, 「1. はじめに」から「3. 2 平音・激音・濃音の混同」までは延が, 「3. 3 終声の混

同」から「4. 終わりに」までは崔が草稿を作成し、両者が検討をして最終原稿を作成した。作成にあたって、馬瀬良雄信州大学名誉教授からご指導を頂いた。記して感謝申し上げます。

注

1. 授業はそれぞれ週一回である。
2. 梅田博之(1994)2頁参照
3. 梅田博之(1984)49頁, 50頁参照
4.

ㅂ	...	[p]	ㅃ	ㅅ	...	[t]
ㄱ	...	[k]	ㄴ	...	[n]	...
ㅇ	...	[ŋ]	ㄹ	...	[l]	

参考文献

- 梅田博之 (1994) 「韓国語の母音」『言語研究』第106号
 ——— (1984) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55号
 김승곤 (1986) 『음성학』 정음사
 亀井 孝, 河野六郎, 千野栄一 (1989) 『言語学大辞典』第2巻 三省堂
 日本語教育学会 (1982) 『日本語教育辞典』大修館書店
 服部四郎 (1984) 『音声学』岩波書店
 馬瀬良雄 (1994) 「台湾・韓国日本語学習者の日本語音声の特徴と日本語教育への提言」『日本語研究』第14号
 油谷幸利, 門脇誠一, 松尾 勇, 高島淑郎 (1993) 『朝鮮語辞典』小学館

聞き取り調査項目：紙幅の都合で省略する。